

### 1-1-3\*

## 長母趾伸筋腱皮下断裂の1例

かい ふみろう

- 甲斐史朗<sup>1,2</sup>、桜庭景植<sup>1</sup>、雅楽十一<sup>2</sup>、  
野尻英俊<sup>2</sup>、尹 善弘<sup>2</sup>、酒井健介<sup>2</sup>、  
金 成道<sup>3</sup>

<sup>1</sup>順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ医学、  
<sup>2</sup>最成病院、<sup>3</sup>瑞江整形外科

【目的】長母趾伸筋腱（以下EHL）皮下断裂は比較的まれな外傷である。筋腱移行部での皮下断裂に対して腱移行術を行い良好な結果を得たので報告する。

【症例】30歳、女性、プロキックボクサー、平成16年6月、キックボクシングの練習中に相手の肘を右下腿で蹴った直後より下腿遠位前外側部の痛みが出現、その後も症状は続いていたが放置していた。同年9月、交通事故にて右母趾が屈曲強制された際、右下腿遠位前外側部の痛みが消失するとともに母趾が伸展不能となり当院に初診となった。初診時、右母趾の伸展障害と触診での下腿遠位前外側部に陥凹と圧痛があり、神経所見では右母趾伸展不能以外には知覚障害を認めなかった。単純X線所見は異常を認めず、T2 MRI画像ではEHL筋腱移行部での高信号を確認できた。以上よりEHL皮下断裂と診断し手術を行った。手術は右第2趾長趾伸筋腱をEHLへ腱移行術を行い、術後5週間のギプス固定後可動域訓練を開始した。【結果】軽度伸展制限を残すものの日常生活に支障なく、試合に復帰した。

【考察】我々が猟渉しえた長母趾伸筋腱皮下断裂16例のうち筋腱移行部での皮下断裂は7例であった。自験例では、蹴りによる筋腱移行部への繰り返される外力により同部位の脆弱性を生じ、さらに交通事故で母趾屈曲位にて過大な張力がかかり断裂が生じたと考えられた。

### 1-1-4\*

## 腓骨筋腱脱臼を伴う踵骨変形治療骨折の1治験例

たにむら えり

- 谷村絵里、須田康文、畔柳裕二、  
長島正樹、谷川英徳、戸山芳昭

慶應義塾大学整形外科

【はじめに】腓骨筋腱完全脱臼を伴った踵骨変形治療骨折に対して術式を工夫し良好な成績が得られたので報告する。

【症例】61歳女性。平成18年4月交通事故にて右踵骨骨折を受傷。1週後近医にて観血的整復固定術が施行されたが、右踵外側部に著しい疼痛が残存したため同年10月当科紹介受診、平成19年5月手術目的で入院となった。

【入院時現症】肉眼上右踵部は外側に突出、腓骨外果外方に腱様の腫瘤を認め、同部と踵外側部に著明な圧痛を認めた。疼痛のため連続歩行距離は100m以下であった。

【画像所見】単純CTでは後距踵関節の適合性は保たれていたが、踵骨体部は著明に外側に突出し、外果外方には小骨片を認め、その間に腓骨筋腱と思われる軟部組織の介在を認めた。以上より腓骨筋腱脱臼を伴う踵骨変形治療骨折と診断し手術を行った。【術式】長・短腓骨筋腱は双方外果外方に完全に脱臼し、外果直下には突出する踵骨外壁を触れた。まず後距踵関節外下方より載距突起後下方内側に向かう斜めの骨切りを行った。踵骨を内後方に移動し螺子固定したのち、外果後下端を切除し、外果残存部に骨溝を作製することで腓骨筋腱の走向を再建した。

【術後経過】術後6カ月の現在、踵外側部痛は消失し連続歩行距離は500m以上可能となっている。

【結語】踵骨変形治療後の遺残痛に対しては病態を明らかにしそれに応じた術式を選択することが重要である。